

人文会ニュース

2006.4

巻頭エッセー 自然保護を商売にするという発想 ……	池田清彦	1
書店現場から 忘れられた本? ……………	宇田智子	3
十五分で読む教育学 ……………	広田照幸	5
「じんぶんや」の試み ……………	和泉仁士	15
図書館と電子ブック ……………	赤澤久弥	25
研修旅行報告		

戦後思想の名著50

岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一 編
戦後思想を代表する50冊の「名著」を読みなおしながら、戦後啓蒙の成立、戦後啓蒙の相対化、ポストモダン・ポスト戦後の三つの時代として日本の戦後思想史を構想する。
●3570円(税込)

徹底討論 私たちが住みたい都市

山本理顕 編
身体・プライバシー・住宅・国家/工学院大学連続シンポジウム全記録
都市の現在と行方をめぐって、伊東豊雄×鷺田清一、松山巖×上野千鶴子、八東はじめ×西川祐子、磯崎新×宮台真司のトークリングで展開されたシンポジウム全記録。
●2310円(税込)

平凡社 〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
TEL:03-3818-0874 <http://www.heibonsha.co.jp/>

小泉政治全面批判

自立・民主・調和の日本か 従属・独裁・対立の日本か
森田 実 [著] ISBN 4-535-56466-4 ◆1900円

時代が病むということ

無意識の構造と美術
鈴木國文 [著] ISBN 4-535-98256-9 ◆3660円

こころだって、からだです
加藤忠史 [著] ISBN 4-535-56232-6 ◆1575円

 日本評論社

東京都豊島区南大塚3-12-4 (価格は税込)
TEL:03-3987-8621 <http://www.nippon.co.jp/>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

思索日記

ハンナ・アーレント／青木隆嘉訳……………6510円
全体主義とのたたかひの過程でアーレントが敢行した西洋哲学の伝統との対決の記録。アーレント理解のために不可欠の一級資料。(全巻)

ジャン・メリエ遺言書

石川光一・三井吉俊訳……………3万1500円
十七世紀末、十八世紀初頭、フランスの田舎司祭が神々と宗教の虚妄なることを論証して旧体制を根底から震撼させた啓蒙期の代表的文書。異文考証・訳注・解説を付した完訳地下

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎03(5214)5540 / 表示価格は税込です

中村屋のボース

大佛次郎論壇賞、アジア・太平洋賞大賞受賞
◎インド独立運動と近代日本のアジア主義◎

中島岳志

■2520円

R・B・ボース。一九一五年、日本に亡命したインド独立の闘士。アジア解放への希求と日本帝国主義との狭間で引き裂かれた、懊悩の生涯。ナショナリズムの功罪とは何か?を描く、渾身の力作。
◎朝日新聞2月5日「天声人語」で紹介されました!

白水社

東京都千代田区神田小川町 3-24
tel.3291-7811 / fax.3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp> *価格は税込

自然保護を商売にするという発想

池田 清彦

小さな時から虫ばかり採っていた。今でも時々虫採りに行く。五十年近く虫を追いかけてつくづく思うのは、昔はごく普通だった虫が珍しくなった例が多いことだ。珍しかった虫は今でも珍しいが、生態が判明してむしろ採り易くなった種の方が多い。

どんな虫が珍しくなったかというところ、里山と草原の蝶である。たとえば、ウラナミアカシジミという蝶がいる。東京近郊の雑木林には沢山いて、僕が中学生の頃は六月から七月にかけての出現期には、夕方梢の上で乱舞しているのが少し離れた所からでもよく見えた。それが今では、一生懸命探さないと見つからない蝶になった。アカシジミもオオミドリシジミもミズイロオナガシジミも同じように珍しくなった。これらはすべて里山の蝶だ。

草原の蝶の一部もまた数が激減している。高校生の頃よく虫採りに行った蓼科の草原で、一番普通の蝶はコヒヨウモンモドキであった。クガイソウの花に三頭も四頭も群れていて、あまりの数の多さに、十頭も採れば後は採る気をなくした。採る気になれば、三百でも四百でも採れたろう。今、同じ場所に行っても影も形もない。幼虫がクロオオアリの巣で育つという特異な習性をもつクロシジミという蝶は、五十年ほど前は武蔵野の雑木林や荒地でごく普通の種であったという。私が中学生の頃までは、高尾山にはまだ生息していた。恐らく今は東京都下では絶滅したと思われる。沢山いた山梨県の草原でも、生息地はどんどん狭くなり数もごく少なくなった。

これらの蝶が激減した原因は里山や草原が荒廃したからである。多くの日本人が親しんだ故郷の山や森や草原は、実は本当の意味での自然ではない。人間が手入れをして維持してきた、いわば人工の半自然である。人々が農耕をはじめるまで、里山などというものはなかった。縄文時代の頃から人々は定住して山の木を切つて燃料にし、野菜などの栽培をはじめめるようになった。弥生時代になって大規模な稲作をはじめると、里山は生活のためにならなくなってはなら

ぬ存在になった。

日本の里山の多くは放置しておくで遷移が進んで常緑広葉樹の林になってしまふ。東京の近郊であればアラカシやツブラジイの極相になる。この林を伐採し続けると、落葉広葉樹のコナラやアベマキの林になる。アラカシのような常緑広葉樹は根に養分をあまり蓄えておらず、一方コナラなどの落葉広葉樹は根に充分養分を蓄えているので、伐採すると再生力に差が生じ、少数派のはずの落葉広葉樹が優勢になるのだ。落葉広葉樹の林は春のはじめまで、林床に比較的阳光が当たるので生えている下草の種類組成も全く異なってくる。さらに下草は様々な用途に使うため時々刈られるので、それに適した種が繁茂することになる。日本の里山でごく普通に見られた生物の多くはこういった里山に適應したもののなのだ。先に述べたウラナミアカシジミもクロシジミも、日本を代表する昆虫であるオオムラサキもカブトムシもオオクワガタも里山の生物だ。

一九六〇年頃を境に日本の農業の形態は激変した。さらには薪炭林としての雑木林の役割もなくなつて、日本の里山は荒廃し、それに伴つて里山の昆虫は激減して、中には絶滅危惧種と言われるまでになつたものも多い。こういう生物を保護するには、天然記念物にして捕獲を禁止してなるべく人為が入らないようにするといった従来の自然保護のやり方では全くダメである。人間が手を入れなければ里山は守れないのだから、労力をかける他はない。

とはいつても里山の保全のために、税金を注ぎ込んだら、税金がいくらあつても足りない。従来の自然保護の考えのダメな所は、自然保護は金にならないと決めつけて、税金とボランティアに頼ろうとの考えが強すぎた所だと思ふ。発想を引っくり返して自然保護を商売にすることを考えよう。これからの時代、里山はともステキな商品になると思ふ。原生自然の保護もエコツーリズムといった形で少しは商売になるが、なるべく人為が入らない方がよいわけだから、

所詮はなるべくそつと観察するだけである。里山は違ふ。里山の保全は里山の生物を適度に採取することにより成り立つわけだから、お客さんからお金を頂いて、生物を適度に採取してもらえばよいということになる。雑木を切つて炭を焼いたり、きのこを栽培したり、虫を採つたりしてもらつて、その代わり里山の保全のための料金を頂こうというわけだ。もちろん常にモニターしながら過収奪にならぬように管理する必要がある。二十一世紀の自然保護のあり方のひとつとして、採取しながらの保全という考えはステキだと思ふ。

(いけだ きよひこ・生物学者)

忘れられた本？

宇田 智子

古い本に、「書物が雑誌になって来た」という話が出てくる。

新聞の広告にしてからが「今月の新刊」というのである。そして、その「今月の新刊」が、恐らく三カ月くらいしか続いては広告されず、そのうち多分、出版社からも読者からも忘れられてしまう。

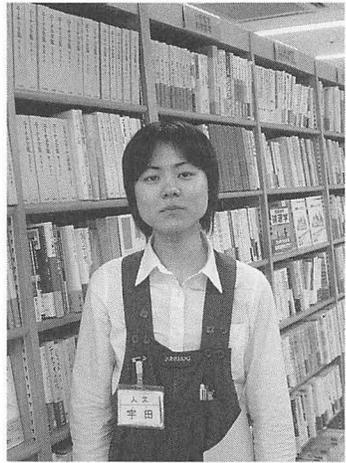
（福原麟太郎『本棚の前の椅子』文藝春秋）

初出は一九五八年である。五〇年前も状況は同じだったらしい。

しかし、出版社は知らず、読者はそう簡単には忘れない。昨日返品した本のお問い合わせもあれば一ヶ月前の書評を切り抜いてくる人もいるし、五〇年前に出た本を探している人もいる。

年末から年明けにかけて、人文書の売り場で「四六判宣言^{*1}」のフェアを開催した。「四六の会」の十一社に出品リストを作っていただき、こちらが各社二〇点ずつ選ぶ。出版社と判型に縛られるフェア、逆にいうとそれしかテーマのないフェアに不安を抱きつつも並べてみると、上から下まで四六判の面陳、というのは意外に迫力があつた。そのおかげもあってかお客さまの反応はよい。なかでも人間関係の悩みをあつかう心理学、会社や労働についての考察、論理学や物理学の読み物がよく動いた。「人文書」といわれてまず思いつく哲学や歴史からは少しずれている。

ゆるやかなジャンルごとには並べながら、困ったのは『ビル・ゲイツの面接試験』（青土社）だった。どんな人が読むのだろう。マイクロソフトの企業研究をするのか、就職活動に役立てるのか、クイズを楽しむのか。青土社の目録では



筆者近影

ての本がたくさんある。

「はじめてであった本は、みな新刊」

「専門書販売研究会」^{*2}のうたい文句を思いだし、納得した。古くても人文書でなくても、目について手にとってもらえばあとは人と本との対決になる。その機会をつくるべく、「四六判宣言」に「専門書ブックフェア」、また冊子『人文書のすすめ』など、出版社が既刊を忘れないように働きかけてくれるのは心強いことだ。

この店は広いので、新刊でなくなっても棚には残す。とはいえどうしても限りがあるから、あきらめて返したり、ほかのジャンルに置いてもらったりもする。そうやって目の前から消えてしまった本を、忘れずにいたい。フェアに入れたいそのうち棚に戻したりして、返品が今生の別れにならないよう気を配りたい。本当に出版社からも読者からも忘れられた本があるとすれば、それを思いださせるのが書店の仕事だと思っている。

- * 1 「四六判宣言」 出版社十一社による共同企画。人文会から八社が参加されています。
- * 2 「専門書販売研究会」 出版社十社による会。人文会から二社が参加されています。

（うだ ともこ・ジュンク堂書店池袋本店）

「批評・文化史・文明論」という項目に入っている。ますますわからない。えい、と目の高さの棚とにかく置いてみた。気がつくとも減っている。ここから売れたの？と疑いながら補充すると、また減っている。その繰り返しだった。店ではふだん「業界・企業研究」という棚に置かれ、定番商品となっているようだ。それが人文書の売り場でも売れるとは。

自分たちが企画するフェアでも思いがけない本が売れることはよくあるけれど、今回のフェアはいつも以上だった。何しろ人文書だけ見ている目に入ってこない、店員にとってもお客さまにとっても初め

十五分で読む教育学

一 教育学という分野の雑多性

そもそも、教育学という分野は広い。「教育」という事象を考察するために、さまざまな方法や視点が用いられている。教育哲学や教育史学のような人文学的なアプローチもあれば、教育社会学や教育法学・教育行政学のような社会科学的なアプローチもある。教育心理学や身体教育学のような、自然科学に近いアプローチもある。分野や諸概念をオムニバスの紹介したものとしては、『AERA Mook 新版 教育学がわかる。』（朝日新聞社、二〇〇三）や、田中智志『教育学がわかる事典』（日本実業出版社、二〇〇三）がよくできている。日本教育学会の『教育学研究』誌の課題研究や特集をたどると、教育学における近年の流行や関心の所在がよく

わかる。また、『教育学年報』第一一〇号（世織書房、一九九二―二〇〇四）は、新しい方向を目標してきたこの十数年の教育学の手探りの様子をよく示している。しかし、それらを通覧してみても、教育学について焦点の定まった像は結びにくい。分野が違つと「教育学者」相互の間ですら、コミュニケーションが成り立たないことがしばしばである。「雑多な学問の寄せ集め」（佐伯胖）のようである。だから、学問としての「教育学」の全体像を俯瞰することは、非常にむずかしい。ここでは、社会の現実や教育の現実の変化を、反省的に学問に反映させようとする動きを中心に、教育学の成果の整理をしてみた。

広田 照幸

二 普遍的教育学の説明力の低下

戦後日本の教育学は長らく、教育学の自律性や固有性を求める理論的関心と、保守政権の教育政策に理論・運動両面で対峙する現実的関心とによって、形作られてきた。一九七〇～八〇年代にその中心にいたのが、堀尾輝久であった。堀尾の『現代教育の思想と構造』（岩波書店、一九七一―一九九二）は、「私事の組織化としての公教育」像を打ちだし、その後の教育学全体に大きなインパクトを与えた。堀尾は、「人権としての子どもの学習権」と「発達の科学に依拠した科学性」という二つの原理をすえた教育学の体系を展開した。前者は、『教育の自由と権利』（青木書店、一九七五―二〇〇二）や、『教育と人権』（兼子仁と共著、岩波書店、一九七七）、後者は、大田堯他編『岩波講座 子どもの発達と教育』（全八巻、一九七九～八〇）や、『人間形成と教育』（岩波書店、一九九一）などにまとめられていった。

ところが、「人権」の普遍性や「発達」の科学性は、現実を批判する足場にはなりえても、それら自体では、現実がなぜ、どの様になってこうなっているのかをうまく説明できるものではなかった。現実の教育の複雑さを実

証的に分析するツールではなかったからである。

そうこうしている間に、一九七〇～八〇年代の教育現実の大きな変化は、普遍的な足場に依拠した教育学の説明力を低下させていくことになった。

大きな変化とは、第一に、学校問題や青少年問題の浮上である。教育学の研究が学校の日常や青少年の生活世界をうまくとらえきれない感じが強まった。そうした中、評論家の小浜逸郎は、『学校の現象学のために』（大和書房、一九八五―一九九五）や『症状としての学校言説』（JICC出版局、一九九一）を書いて、教育的な枠組みと教育や青少年の現実とが乖離しているさまを、敏感に描き出した。現職教員の岡崎勝による『教師／学校／生徒の実際世界』（三交社、一九九一）や、諏訪哲二『イロニーとしての戦後教育』（白順社、一九八九）などもまた、リアルな学校の世界を伝えるものであった。

第二に、教育がもつ本源的な恣意性や権力性への理論的な自覚が浮上してきたことである。I・イリッチ『脱学校の社会』（東京創元社、一九七七）、M・フリーコー『監獄の誕生』（新潮社、一九七七）、Ph・アリエス『子供の誕生』（みすず書房、一九八〇）の三冊がもった理論的インパクトは、きわめて大きかった。「普遍的」

「科学的」という語で隠蔽されていた、教育諸観念の歴史・社会的被造性や権力としての性格が明らかにされたからである。

三 〈教育〉の問い直し

こうした中で教育哲学・思想の重要な課題となったのが、一つには、近代教育学が自明の前提としてきたものへの問い直し、もう一つには、〈教育〉の旧来の枠組みでは見えなくなっていた部分から、教育の含意をずらし、再定義しようとする動きであった。前者は、『近代教育フォーラム』（教育思想史学会、一―一四号）を中心にした動きで、たとえば、原聰介他編『近代教育思想を読みなおす』（新曜社、一九九九）、森田尚人・森田伸子・今井康雄編著『教育と政治・戦後教育史を読みなおす』（勁草書房、二〇〇三）などがある。

後者には、権力的で垂直的な教育的関係を原理的に組み替えようとする一連の試みがあり、たとえば、高橋勝『子どもの自己形成空間』（川島書店、一九九二）、土戸敏彦『冒険する教育哲学』（勁草書房、一九九九）、池谷壽夫『教育』からの離脱（青木書店、二〇〇〇）などである。これらの研究は、子どもの主体性の側に軸足を

移すことで、教育関係を組み直すとするものだが、それに対して、岡田敬司の一連の研究は、旧来の教師論や教育関係論がそぎ落としてきたものを理論的に回収して、それを教育者の「役割」や教育関係論に再度組み込みもうとするものである（『かかわりの教育学』一九九三、『コミュニケーションと人間形成』一九九八、『自律』の復権』二〇〇四、など。いずれもミネルヴァ書房）。

それらよりもっと根源的なレベルから〈教育〉を見直そうとする研究もあり、より挑発的でチャレンジングな議論を展開している。たとえば、西平直は『魂のライフサイクル』（東京大学出版会、一九九七）で、「発達」を直線的なものから円環的なものへと見直すことで、教育における人間観を見直そうとした。矢野智司は、『自己変容という物語』（金子書房、二〇〇〇）で、「生成」と「贈与」という概念を手がかりに、一方的な教え込みとは異なる教育の作用を考察した。「生成」は、教育人間学の主要なキイ・ワードになっている。『教育』の解読』（田中智志編、世織書房、一九九九）あたりまでは近代教育思想の批判・解体の方向を志向していたように見えた田中智志は、『他者の喪失から感受へ』（勁草書房、二〇〇二）では、ポストモダン論を下敷きに、新たな教育関係の構築の可能性を模索している。小玉重夫は、

H・アーレントの議論を援用しつつ、教師の想定する教師—生徒関係を越えていく存在としての子どもの可能性に注目している（『教育改革と公共性』東京大学出版会、一九九九、『シティズンシップの教育思想』白澤社、二〇〇三）。また、今井康雄は『メディアの教育学』（東京大学出版会、二〇〇四）で、N・ルーマンの議論を手がかりに、現代教育の諸トピックスを鋭く考察し、「教育」を再定義しようとしている。

一般に、これら教育哲学・教育人間学の諸著作は時間や空間を特定しない一般的な原理的考察が多く、そのぶん、やや現実の教育との距離がある。その中で、今井の考察は、抽象度の高い議論をしながらも、同時に、現代の日本の教育の具体相をうまくとらえた分析にもなっている。なお、ルーマンについては、石戸教嗣『ルーマンの教育システム論』（恒星社厚生閣、二〇〇〇）や田中智志・山名淳編著『教育人間論のルーマン』（勁草書房、二〇〇四）などが出され、教育学のリニューアルの一つの足場になりそうである。

教育社会学の方からも、森重雄『モダンのアンスタンス』（ハーベスト社、一九九二）が歴史的な観点から、亀山佳明『子どもと悪の人間学』（以文社、二〇〇一）が、社会学の人間学から、それぞれ、〈教育〉・〈社会化〉の

自明性を解体する作業をやっている。

四 教育言説という問題

こうした研究が出てくるのは、教育を語る言葉が現実から乖離し、空転しているからである。青木純一がいうように、日々の教育実践を組み立て正当化する言葉として、教育学的な概念やスローガンは、無反省に反復・再生産されていく（『実践のナルシズムと教育言説』『教育の臨界—教育的理性批判』情況出版、二〇〇五）。いわば、教育に携わる者や眼前の教育を正当化しようとする者は、一定のカギ言葉（『青少年の健全育成』とか、「思いやりの心を育む』とか）に習熟すれば、思考停止したままいくらでも言説を組み立てることができるのが、教育の世界である。

実際、「教育書」と呼ばれるジャンルの本の多くは、反論がむずかしい、美しいカギ言葉を使って、自分の思いこみや教育信条を、恣意的あるいは偶然的な事例を持ち出すことで根拠づけようとするものであるというケースが多い。「教育学」と名がついた立派な研究書ですら、往々にしてそういう情けない代物であったりする。「子ども自身の声に耳を傾けることが大事だ」という信念だ

けで一冊が書けるし、「父親が威厳をもつて子どもに接するのがいい子育てだ」という信念だけでも一冊が書けてしまう。著者の思い込みを都合のよい理論や事例で論証・例証しているだけなのだから、いくらたくさん理論や事例が並べられてあっても、そうした本は、学問的な深みや説得力に欠けている。思想停止の上に成り立っている本がいっぱいあるのだ。

そうした思考停止を問題にし、言説そのものを教育問題・社会問題の要素として組み込んで考えることも可能である。そこには、教育言説を固有の対象として考察する方向と、言説と実態との距離を実証的に明らかにしようとする方向とがある。

前者は、たとえば、小浜逸郎・諏訪哲二編著『間違いだらけのいじめ論議』（宝島社、一九九五）や今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか』（新曜社、一九九七）が興味深い。後者は、たとえば、家庭の教育力低下言説を批判するために、しつけ・家庭教育の歴史をたどってみた広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』（講談社現代新書、一九九九）などがある。また、両者を組み合わせたものとして、古賀正義編『子ども問題』からみた『学校世界』（教育出版、一九九九）、広田照幸の『教育言説の歴史社会学』（名古屋大学出版会、

二〇〇一）や同『教育不信と教育依存の時代』（紀伊國屋書店、二〇〇五）などがある。

五 「実践知」の世界

言説と実態の乖離は、教育研究と教育実践との乖離でもある。子どもの学校離れ・勉強離れ、授業の困難さなどの問題に対して、「実践知」といえるような分野で対処しようとする流れが作られてきている。

それは一方では、既存のアカデミズム教育学と距離をとった、教師たちの著作になってあらわれる。

たとえば、教師—生徒関係の権力性を熟知したうえで、あえてそれを教育的なパフォーマンスに転用することで、学校現場を立て直す論理にしていこうとする、「プロ教師の会」の諸著作がある。河上亮一『プロ教師の道』（JICC出版局、一九九一）、同『プロ教師の覚悟』（宝島社、一九九四）や、諏訪哲二『管理教育』のすずめ』（洋泉社、一九九七）などである。あるいは、問題の焦点を教師の「教え方」のレベルの問題に限局し、その洗練によって、よりよい学校や授業を作っていこうとする、向山洋一が率いる教育技術法則化運動のような動きもある（向山洋一・TOS S編集委員会編『日本教育

技術方法大系』(全一五巻、明治図書出版、二〇〇一、など)。

教師によって書かれた本や教師論のたぐいの本は、もとと雑多にあるが、教育学でとことん議論されてきたようなことをろくに参照もせずには書かれている本が少なくない。個々の執筆者にとつてはかけがえのない体験だったり、貴重な知見だったりするのかもしれないが、「読み物」の域を出なかつたりする。「教育書」と「教育学書」の知的落差は非常に大きい。大きな書店や公共図書館に行つて、本の並びを見て嘆息することもしばしばである。

他方では、アカデミックな教育学の側が、教育実践がもつ固有の論理に密着していこうとする動きもある。その一つは、佐藤学による「学びの共同体」論である。佐藤は、一九九二年の宣言的な論文で、それまでの客観的・実証的な「授業研究」を痛烈に批判し、教師の実践的研究を軸にした「実践の理論化」「実践的理論の創出」の方向を、あるべき方向として示した(『パンドラの箱』をひらく)『授業研究』批判』森田尚人他編『教育学年報1 教育研究の現在』世織書房)。佐藤はさらに、共生の原理と主体的な学習によって組織される学校作り、学びの共同体、という方向を提示する(『学び』その

死と再生』太郎次郎社、一九九五、『教師というアポリア・反省的実践へ』世織書房、一九九七、『学びの快楽・ダイアローグへ』世織書房、一九九九、など)。

佐藤の議論が教育現場で大きな人気を博したのは、おそらく、第一に、「子どもの学習権」の枠組みでは論理的に十分に肉付けしえなかつた、教師の役割や意義を明示化できたことである。佐藤の議論は、子どもたちの主体性を尊重しつつ、同時に、彼らの学校ばなれ・勉強ばなれをくいとめる教師の積極的な役割も示すものであつた。それは、日々の指導場面において、子どもの主体性の尊重と教師の指導力という二つの間で揺れる現場の教員に、歓迎されるものであつただろう。また、第二に、異質なものをそのまま認めつつコミュニティとして組織化される「学びの共同体」論は、九〇年代後半から加速化してきた新自由主義的な教育改革に対して、明確な対抗イメージを提供しえた点もあつた(佐藤『教育改革をデザインする』岩波書店、一九九九)。

アカデミックな教育学の側からのもう一つの対応は、『臨床教育学』という新しいジャンルの浮上である。それは、八〇年代以来の臨床心理学のめざましい成功に刺激された面もあつただろうし、科学的で実証的な知への懐疑というムード(それは、佐藤学の「授業研究」批判

とも関わるのだが）の広がり、中村雄二郎「臨床の知とは何か」（岩波新書、一九九二）などを契機として、教育研究の見直しにつながった面もあっただろう。しかし、ここで強調しておきたいのは、既存の教育学が教育実践の現場が抱える困難に十分対処できていないことへの反省が、「臨床教育学」ブームを作っただろうということである。

九〇年代半ばには、まだ「臨床教育学」はその新奇な名称だけが浮上していた。そういう中で、臨床心理学から、河合隼雄が『臨床教育学入門』（岩波書店、一九九五）を書いた。教育人間学から、和田修二・皇紀夫編『臨床教育学』（アカデミア出版、一九九六）が出された。教育社会学から、新堀通也『教育病理への挑戦…臨床教育学入門』（教育開発研究所、一九九六）が出された。ただし、教育社会学からの参人は、新堀のような社会学理的なものとは途絶し、むしろその後は「日常の物語の異化」という視点から、エスノグラフィのような方向に進んでいる（酒井朗、志水宏吉など）。

ともあれ、いわば、名称のみが先行して制度化された「新学問」がどういう性格のものになるのかは、諸ディシプリン間のバトルになっている、ということである。近年も、日本教育学会をはじめ、教育諸学会で「臨床」

を主題に課題研究やシンポジウムが組まれたり、小林剛・皇紀夫・田中孝彦編『臨床教育学序説』（柏書房、二〇〇二）など、「臨床」をタイトルやサブタイトルにもつ教育学の本が増えてきて、活況を呈しているように見える。しかし、果たして「学」としての独自性をもった具体的成果を出しうるのかどうかは、まだ私にはよくわからない。また、「教育学は教育現場では役に立たない」という批判に応答しようという志向性が、「臨床」ばやりを作っているといえるのだが、そこから立ち上がってくるものが、「現場」に往々見られる視野狭窄と思考停止を、そのまま学問内に抱え込んでしまう危険性も感じなくはない。

六 急激な教育改革

臨時教育審議会（一九八四～八七）以降、保守派の中で新自由主義イデオロギーが台頭し、九〇年代後半以降、本格的な教育改革が進んできている。官僚統制よりも市場原理に軸足を移すなど、旧来の保守派のイデオロギーとは全く異なるため、運動論的な旧来の枠組みのままでの教育批判や現状分析では的はずれな議論になってしまいう事態が出来している。「五五年度体制」下で作られた

「戦後教育学」の視座が通用しなくなっているのである。また、教育改革は、より全体的な国家のあり方の見直し——行財政改革——と連動して進められているので、教育学的理念や価値に照らしたり、教育問題への対処の実効性に照らして改革の是非を評価する議論もまた、「教育」の枠の外が見えなくなること、ある種の視野狭窄に陥ってしまう。

にもかかわらず、教育学の著作にしばしばみられるのは、時代の変化を読み切れないまま「戦後教育学」の枠組みを堅持した「原理的反対」論や、時代の変化を全面的に受け入れ、理念やビジョンもないまま状況追隨的に改革を下請けするだけの著作である。教育改革という主題は、当然ながら政治的立場によって多様に議論が分かれる主題ではあるものの、現状分析の鋭さや批判・分析的視点の説得力という点で物足りないものが少なくない。

教育改革の流れの整理としてすぐれているのは、少し古くなったが、市川昭午『臨教審以後の教育政策』（教育開発研究所、一九九五）がある。また、児美川孝一郎『新自由主義と教育改革』（ふきのとう書房、二〇〇〇）は、大きな整理が示唆的である。

現在の教育改革は、英米で進められた改革の良い面ばかりが注目されて、慎重さを欠いたまま輸入されつつあ

るといえる。すなわち、改革推進派は、ご立派な改革理念やうまくいっている事例ばかりを強調して、改革の原理解はらむアポリアや、改革が実際にもたらず問題点を十分考慮してきていないのである。だから、むしろ、改革の実際の功罪を社会科学的に分析したり、構造や論理がはらむ問題を突きつめたりしたものが、もっと注目されるべきである。その意味で、A・H・ハルゼー他編『教育社会学』（住田正樹他編訳、九州大学出版会、二〇〇五）や、J・ウィッティ『教育改革の社会学』（堀尾輝久・久富善之監訳、東京大学出版会、二〇〇四）は重要な本である。また、藤田英典・志水宏吉編『変動社会のなかの教育・知識・権力』（新曜社、二〇〇〇）、A・グリーン『教育・グローバリゼーション・国民国家』（大田直子訳、東京都立大学出版会、二〇〇〇）なども挙げておきたい。

バランスのとれた現状認識に基づいて、九〇年代末からの教育改革に関して全般的な批判を展開しているのが、藤田英典である。『教育改革』（岩波新書、一九九七）、『市民社会と教育』（世織書房、二〇〇〇）、『義務教育を問いなおす』（ちくま新書、二〇〇五）を挙げておきたい。

各論的というと、第一に、「学力」をめぐる問題は、

さまざまな教育改革の動きの中で、特に世間の関心を惹いた。自発的な「学び」論が九〇年代半ばまで隆盛になっていた中で、エア・ポケットに入っていたトピックであった(田中耕治『学力』という問い)『教育学研究』第七〇巻第四号)。「学力低下」が取りざたされて、国際競争力を気にする政治家や産業界にとっても、わが子の進学が気になる個々の親にとっても、だれもが無関心ではいられないという意味で、最も関心を集める「教育問題」となった。「学力論争」の整理は、市川伸一『学力低下論争』(ちくま新書、二〇〇二)や、中井浩一編『論争・学力崩壊2003』(中公新書ラクレ、二〇〇三)、山内乾史・原清治『学力論争とは何だったのか』(ミネルヴァ書房、二〇〇五)などでなされているが、総体として教育学者の学力論は、社会・経済的な文脈の

問題という視点が弱い。そんな中で、『大衆教育社会のゆくえ』(中公新書、一九九五)で、教育機会と社会階層という問題を一般の人たちに広く伝えた荻谷剛彦が、再生産と格差という視点から、論争の一つの軸になっていった(荻谷『階層化日本と教育危機』有信堂高文社、二〇〇一、荻谷・志水編『学力の社会学』岩波書店、二〇〇四)。実証データで議論を組み立てたのが荻谷(や他の教育社会学者)の強みだし、不平等や格差の観点は重要だが、教育政策の是非を議論するためには、本来はもっと多様な社会的視点や軸を、教育学が準備する必要があるように思われる。

第二に、「日の丸・君が代」や教育基本法改正問題など、新保守主義、新国家主義的な教育政策の動きである。ここでは、旧来の左右対立の構図が生きていて、伝統的な

説中国文明史

全10巻
中国五〇〇〇年、まるごと博物館。

- ①「先史」文明への胎動
- ②「殷周」文明の原点
- ③「春秋戦国」争覇する文明
- ④「秦漢」雄偉なる文明
- ⑤「魏晉南北朝」融合する文明
- ⑥「隋唐」開かれた文明
- ⑦「宋」成熟する文明
- ⑧「遼西夏金元」草原の文明
- ⑨「明」在野の文明
- ⑩「清」文明の極地

稲畑耕一郎 監修 劉焯 編
※白抜き数字の巻は既刊
④⑤⑩巻定価3360円(税込)
⑦巻定価3675円(税込)
好評、隔月刊行中



創元社 <http://www.sogensha.co.jp/>
〔本 社〕大阪市中央区淡路町4-3-6
〔東京支店〕東京都新宿区神楽坂4-3 燦瓦塔ビル

政治的争点であるだけに、それぞれの立場の綱引きのよ
うな形でたくさんの本が出ています。村上義雄『暴走する
石原流「教育改革」』(岩波書店、二〇〇四)などを読む
と、現在進行している事態に暗澹たる気分になる。教育
基本法改正の動きが歴史的段階として新しい事態である
ことを強調したのもとして、大内裕和『教育基本法改正
論批判』(現代書館、二〇〇三)や、児美川前掲書を挙
げておきたい。市川昭午『教育基本法を考える』(教育
開発研究所、二〇〇三)は、冷静でバランスのとれた議
論をしている。広田照幸『愛国心』のゆくえ(世織書
房、二〇〇五)は、これまで出されていない挑発的な論
点を提起している。

最後に、このかんの急激な教育改革の背景にあるのは、
急速なグローバル化への対応という国家戦略であるとい
うことを指摘しておきたい。教育学としては、教育の新
しい方向が、教育の現状の内在的な布置から生まれると
考えて研究するかぎり、変動要因としての教育を取りま
く枠組みの変化が視野から落ちてしまうように思われる。
新自由主義的な教育政策も新保守主義的なそれも、とも
に日本社会の変化や社会構想の変化と結びついて出てき
ている。社会科学の視点をきちんと立てて教育を考察
しないかぎり、現状分析も批判や処方箋も、無批判な

「下請け」か、もしくは的はずれな議論になってしまう。
だからといって、思考停止して、簡単に「地球市民」と
かに普遍的な足場をさがそうとしたりすると、結局のと
ころ、リアルな現状分析や慎重な具体的選択肢の検討か
ら背を向けてしまうことになる。

新自由主義・新保守主義がグローバル化への対応の一
つの選択肢にすぎないとしたら、教育学がきちんと考え
ないといけないのは、それらに代わる対抗的な像の構想
を、他の社会科学の分野と交流しながら組み立てていく
ことである。具体的なレベルで未来を構想しようとする
ものとして、市川昭午『未来形の教育』(教育開発研究所
二〇〇〇)や、広田照幸『思考のフロンティア 教育』
(岩波書店、二〇〇四)などがあるが、そうした企図は、
まだ試行錯誤の段階にある。何らかの「普遍的」原理
(＝原理主義)に帰依するのでもなく、「世の流れ」とし
て新自由主義・新保守主義に追従するのでもなく、別の
構想がどこまで理論的に展開でき、どこまで社会科学の
に具体的な肉付けができるのかが問われている。思考停
止に安住しない教育学があるとすると、それはまだ霧の
中にいる。

(広田 照幸・ひろた てるゆき) 一九五九年生まれ。

東京大学大学院教育学研究科教授。教育社会学・社会史専攻

「じんぶんや」の試み

二〇〇四年九月より、紀伊國屋書店新宿本店五階の人文書・文芸評論書売場の一角で、「じんぶんや」というコーナーを始めました。ご存知の方は少ないと思いますので、まずはその概要と趣旨を手短かに説明させていただきます。

概要…毎月替わりで、「本読みのプロ（著者や編集者など、出版関係者）」の方々に、あるテーマにおいて推薦する本を二〇〜三〇点ほどコメント付きで挙げていただき、さらにそのテーマに沿った小エッセイを寄稿していただきます。それらの文書や情報は無料配布の小冊子（B4八つ折一枚）に収め、店頭で配布しております。棚では、いただいたコメントを付けて本を展示し、販売します。（写真①）

主旨…おびただしい情報と書籍の山の中から、それら

和泉 仁士

の本を実際に読んだ専門家の方に選んでいただくことによつて、玉石混交（言葉は悪いですが）の幾多の本の中から、選んでいただいたそれらの本を、そのジャンルにおいて、お薦めです。とお客様に訴えかけることができます。それにより、まずはどの本から読むことか？と迷うお客様や、今まで近寄りなかつたジャンルの本にも、「こういうトピックも面白いな」と思つて近寄つてもらえるような情報を提供できる場を作りたいと考えております。

このコーナーの、もともとの発案者は私ではなく、現在クアランプール店で勤務している宮城という若手社員が提案した企画でした。とても良いと思つたので、是非やりたいと企画書を書いていたところ、いろいろ細かい問題は出てきました。ですが、上司には「考えていて



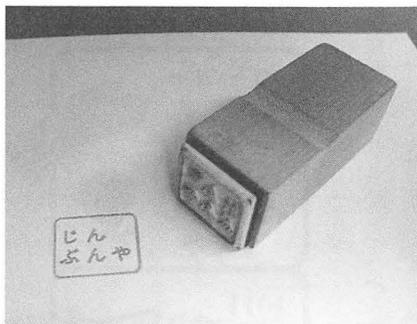
① じんぶんやコーナー俯瞰図

も進まないのだから、細かなことは置いておいて、とりあえず始めたほうが良い。やりながら考えろ」と背中を押され、とにかく始めました。

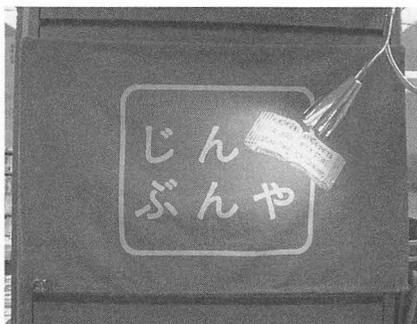
やはり、人文科学関係の業界はのご時世決して好況とはいえない中で、私の勤務する人文書フロアもご多分に漏れずの状況です。従来どおりにも変わらせずに、安穩としているわけにも行かぬという危機感がありました。

ですが、このコーナーを始めた動機としては、「どうせ仕事するのなら、面白いことやって楽しみたい」という私欲に近い部分もあったと思います。決して楽な仕事ではなく、むしろ煩雑な作業が増えるのは目に見えていましたが、このように、著者や編集者など、通常店頭で与えられた仕事をしているだけでは、あまり接することの出来ない方々に接する機会を得て、そこから情報・知識や繋がりを作っていけるといえるものが、これからの仕事において役に立つはずだともいえるのも、今考えるとあつたと思います。

また、この企画において特筆すべきは、宮城の友人でプロのデザイナーの磯田氏（東京半島）や、その磯田氏の友人で、コピーライターの小宮氏（サンアド）を巻き込むことで、社外の人間の無償協力を得ることができたということでした。友人だからということもありますが、動機としては、皆まだ若く、仕事のキャリアとして、書店の店頭で実験的な面白いことが出来れば、タダでもやってみたいという気持ちで手伝ってくれているのです。このご時世になんという幸運でしょうか？そして、そのような動機というのは、なんとも強力なものだと感じています。二〇〇五年四月に、宮城が遠くマレーシアに転勤してしまつた後のことが心配されましたが、今でも無償



③ じんぶんやスタンプと印影



② じんぶんやロゴと暖簾風看板



⑤ じんぶんや小冊子



④ じんぶんや看板

でご協力いただいております。

そして、このデザイナーの磯田氏とコピーライターの小宮氏の二人が、この『じんぶんや』コーナーの礎を築いてくれたといっても過言ではありません。では、その二人の仕事を紹介したいと思います。

まず、磯田氏は、『じんぶんや』コーナーのシンボルとなるロゴ(写真②)を作成して、そのロゴを、普通の書店の店頭で使われるようなパネルの看板ではなく、布にプリントして、暖簾風にしようと提案してくれました。また、推薦コメントのPOPに押す、『じんぶんや』ロゴのスタンプ(写真③)も作成しました。看板も毎月統一規格(写真④)。そして、無料配布する小冊子は、B4の紙一枚を八つ折にするタイプに統一(写真⑤)。小冊子には、磯田氏オリジナルの四コマ漫画を掲載。主人公はじんぶんくん(写真⑥)。「じんぶんや」ブランドの確立です。

小冊子をデザインし、編集してくれる磯田氏は、『じんぶんや』のディレクターです。
「Directする人」という意味において、彼は非

「じんぶんや小劇場」



⑥ じんぶんくん

常にしっかりと、じんぶんや、ブランドを守るべく、方向付けてくれるのです。私がたまに方向が逸れてしまいいそうなことを言うと、臆することなく示唆してくれます。そのような助言に支えられながら、今までほとんど同じトーンを保ち続けてくることができました。彼との付き合いから、デザインや、基本コンセプトというものと、それを守ることの大切さを感じました。

コピーライター小宮氏の最大の功績は、じんぶんやという名前を提案してくれたということです。実はこの「じんぶんや」という企画名を決める前には、もつともつと沢山の候補を考えてもらっていて、それらの中でもつともこの企画の趣旨にフィットする名前を選びました。人文屋（これも候補のうちのひとつでしたが）

ではなく、じんぶんやです。皆さん好みはあると思いますが、従来の人文系の、あまり硬いイメージを表現なるべく出さず、間口を拡げるため、「やわらかく」を意識したデザインに統一しております。並ぶ書籍はどうしても硬いものになるので、外見だけでもまずはやさしいものにしようと考えました。そして、とにかくじんぶんやを人文書のフロアに来る人以外へアピールするべく、店内の階段周りなどに、短冊状の紙に宣伝コピーを印刷したものを貼っておりました（現在こちらはお休ましておりますが、小宮氏は、当「じんぶんや」の宣伝コピーで、二〇〇五年TCC（東京コピーライターズクラブ）新人賞を受賞しました）。

さらに特筆すべきは、これら他業界で働く二人の発想

が、従来の書店員にない感覚のもので、私たちも一緒に準備するうちに、彼らの発想の柔らかさと、我々の発想の固さを感じたものです。特にPRの方法などに關しては、広告業界で働く彼らのノウハウや発想は、とても新鮮でした。自分の周りだけの常識にとらわれていては、どうしても閉鎖的で、枠を出ない発想になってしまいます。自分ではそんな堅物のつもりはなかつたのですが、現実にはすっかり業界の常識の範疇を出ない堅物だつたことを自覚しました。この経験は、今後もどこかで役に立つと信じております。

次に中身や運営について説明させていただきます。もともと、宮城が発案するに至つたきつかけというのはいくつかあります。

一 書店員とはいえ、全てのジャンルのあらゆる本を讀むことが出来ないの、実際に讀んだ有識者のお知恵を拝借したい。

二 各ジャンルの基本書や、埋もれつつある良書を掘り起こし、スポットを当てることができる。一角をそのようなコーナーとして区切り、店内にある種のセレクトショップのようなスペースを作る。

三 回を重ねることによって、それら各トピックの基本書や良書のデータベースを作ることができ、社員

教育に繋がる。(基幹棚にうまく反映させる)

これらの理由のうち、一は主に企画を立ち上げる原動力となりました。元芳林堂書店高田馬場店で、長年ベテラン人文書担当として名を馳せた生田目氏のお話をうかがつたのが、そもそもこの「じんぶんや」を発案するきっかけになつたのですが、元三省堂書店人文書担当の守屋氏(現著述業)に相談させていただいたりして、コンセプトの原型を作りました。人文書の業界は、そういう人々との横の繋がりが良いところだと思ひます。生田目氏のお話も、とある人文系版元・書店の集まりにおいてうかがつたお話ですし、守屋氏も、某版元の社長さんにご紹介いただきました。守屋氏には、快くアドバイスをいただき、しかも「じんぶんや」第一目の選者として、ご自身の関わる「本」のメルマガの同人八名(当時)の方々に選書協力のお話を通していただきました。

二については、様々な書店の現場で、人文基本書の品揃えに關し、代々引き継がれたり、日頃の勉強でメンテナンスされたりしていることでしょう。今では、規模や方法は様々として、データベース化し、管理しているところもあると思ひます。

ただ、そのようなわゆる「基本書リスト」の外にあ

る、何年も前に発行されたきらりと光る本を、専門家の方に教えてもらえる機会というのは、なかなかありません。我々もそういったきらりと光る本との出会いを楽しみ、学習することができます。最近、本や雑誌で、ブックガイド特集などが組まれる機会は多くなっていると思います。本が多過ぎて、何を読むべきか考えるのも大変な世の中です。そして我々は同じように、ある月刊雑誌のブックガイドコーナーを、実際に本も並べて、店頭でやろうという試みです。『セレクトショップ』というのは、例えば小さな靴屋を例に説明すると、売り場面積も広く、とにかく多品種の靴が並んでいる店に比べ、ここに並べてあるものは、『選択肢は少ないが、センスのあるバイヤーの目で選択されたお墨付きの靴』であり、『選択肢が少ない分、選ぶのが楽だし、安心して買える』というようなイメージです。なかなかその間に達するのは難しいと思うのですが、もとの発想としてはそこを目指しております。

三に関してですが、実際確実にものにしていくかどうかは置いておいて、リスト自体は回を重ねるごとに着実に増えています。それをなんらかの形で、有益に使っていかねばならないのですが、その段階にはまだ至っておりません。今後の課題です。

そんな中で、社員教育の成功例として、第二回目、希望が到来する器としての身体になる(二〇〇四年十月)のケースをご紹介します。前出のメルマガジン、『本』のメルマガのコラムで、書店に「身体論」の棚を作りたい」とおっしゃっていた春秋社の編集者小島直人氏に、『身体論』について教えてもらいたくて、依頼させていただきました。『じんぶんや』が企画として立ち上がる段階で、小島さんには是非お願いしようと勝手に心の中で考えていたのです。営業担当の片桐氏を通じて引き受けて頂けたうえに、熱心にあれこれとご指導・ご提案いただけてとても嬉しかったです。『身体論』というのは、当時ちよつとした流行のようなものでもあったのですが、私はいまいち『身体論』というものがよく判らなかつたのです。この時は、フェア開催中に、勉強会と称した飲み会にもお付き合いいただき、紀伊國屋からも新宿本店だけでなく、新宿南店や、玉川高島屋店の人文書担当者も参加し、お酒を飲みながらではありましたが、『身体論』や『アフォーダンス』についての様々なお話を分かりやすくしていただいたという貴重な経験もありました。いままで、なんとなく良く判らない。まさに、そこに差していた本が、なんとなく判った。うえて差せるようになったのではないかと思えます。それ

各紙誌で絶賛!
ベストセラー!!

圧倒的な説得力で描かれる人間社会の宿命

文明崩壊

上 下

滅亡と存続の命運を分けるもの

ジャレド・ダイアモンド／榎井浩一訳

繁栄の裏にひそむ破滅の萌芽とは。古代から現代にいたる多様な事例を検証して、環境への負荷と社会崩壊の相関関係を導き出す。定価各2100円



好評既刊 25万部突破!
ピュリッツァー賞受賞作

銃・病原菌・鉄

—1万3000年に [上・下]
わたる人類史の謎
倉骨 彰 訳 定価各1995円

草思社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8

☎03(3470)6565 定価は税込

<http://www.soshisha.com/>

選者への依頼
選者への依頼は時に苦勞します。大体、「その著者の新刊が出る」とか、「大型企画が始まる」、「季節ものの定番で」などから、選者としてのご協力を依頼するのですが、なんととってもネックになるのは、報酬が無いというところです。著者への直接のパイプというのはほとんど無いので、基本的に出版社の方々を通じて依頼してもらうのですが、出版社さんが著者の方への謝礼

思い出に残る回
どの回にも思い出がありますし、選者の皆様のご協力やエッセイ、コメントが素晴らしいものなので、優秀をつけられるものではないのですが、あえて言うのであれば、第三回目の『もう一度、詩と出会う』(二〇〇四年一月)で、思潮社さんを通じて、小池昌代さん、城戸朱理

は大きな一歩の前進だと思っております。その勉強会はとも良い経験だったので、是非続けたかったのですが、その後はなかなか続けられませんでした。運営だけで精一杯になってきてしまったのです。それではもったいないので、なんとかまた機会を見つけて開催したいものです。

選者への依頼

を肩代わりしてくださるケースもあり、心苦しく思うものです。ただ、先方もなんのメリットも無ければ了承していただけないというところは重々承知しております。店頭が目立つところで大きくPRし、その著者や編集者さんの手がけた本を宣伝・拡販することによって、なんとかギブ・アンド・テイクの均衡を保ちたいと努力しております。



⑦ 小冊子フォルダ

さん、小笠原鳥類さんという三詩人の方々に選書をお願いしました。その際、小冊子に掲載するエッセイを小池昌代さんに書いていただいたのですが、それがほんとうに素晴らしい文章で、いたく感激したものです。本来各回でいただいたエッセイなどは、じんぶんやホームページ (<http://www.kinokuniya.co.jp/04f/d03/tokyo/jinbunyah.htm>) に掲載しているのですが、この小池昌代さんのエッセイだけは、もったいぶってホームページに掲載しておりません。当時の判断で、小池昌代氏による素敵な一文が掲載された特製小冊子も、会場にて配布中。として、あくまでも店頭に来てもらう特典にしました。バックナンバーの小冊子も全て無料で配布しておりますので、この小池昌代さんの文章をお読みになりた

い方がいらっしやいましたら、是非店頭に来て小冊子の一部をお持ち帰りくださいませ。

その小冊子は、磯田氏の素敵なデザインによって、毎回工夫を凝らして作られております。この小冊子の実物(写真⑦)を、是非手にとって見ていただきたいものです。

運営の苦労と今後の展望

ただ、こういったフェアは普通のブックフェアと違い、準備にとても時間がかかるものです。売り上げの規模に比して、労働時間は多く取られる(選者の方々のやりとりや、小冊子作成など)ので、社員の負担は増します。正規勤務時間外の仕事(ばかりではないのですが)ともなると、何かしらの情熱が無ければ続けられません。もちろん私一人でやっているわけではなく、同フロアのスタッフ達が各回交替で(時には連続して:ですが)進めております。各人の個性や興味で、様々なトピックの催しが、ひとつのじんぶんやというパッケージの中で展開されていて、流れを通して見ていると、とても面白いものです(当フロアは文芸評論(詩/俳句/短歌)コーナーも併設しており、文学トピックも入れています)。最初の目標としては、「とにかく続ける」を掲げてい

ました。これだけいろいろな方々に協力を仰いでおきながら、あつという間にコーナー自体が消滅したら、見えるものも見えないと思つたのです。ただ、常に安定した売上が見込めるフェアならいざ知らず、回によつて（テーマによつて）売れる回、売れない回とある中で、どれだけ労働力を割いてよいものかと迷う部分もあるのです。本業（自分の担当棚をしつかりメンテナンスしながら、接客などもしつかりこなす）をおろそかにせず、^ゞじんぶんや^ゞコーナーにおいても、クオリティの高いものを維持し続けるというのは、労働時間の制約の中では、なかなか厳しいものです。先ほども述べましたが、結局通常勤務時間だけでは終えることが出来ず、時間外ボランティア労働に頼らざるを得ない部分も出てきているのが現状です。

売上の良し悪しだけで物事を判断するのは危険ですが、このコーナーを継続しているのも、長期的には「固定客を囲えるような名物コーナーを作ろう、そこから売上げを伸ばして行こう」という目論見があり、最終的な目標は「フロア全体の売上を伸ばす」というところに収斂されるのです。業界的に厳しい中、すぐに目覚しく売上が稼げるような奇手・妙手など存在しないと思います。そんななかで、いつまで続けられるかは未知数ですが、

多少売上が芳しくなくても、続けられるうちは、^ゞ楽しみながら^ゞこつこつと続けて行きたいと思えます。

最後に、^ゞじんぶんや^ゞにご協力いただいた選者の皆様、そして取り次いでいただいた、出版社の皆様、周囲でサポートしてくれた社内の皆様にも、この場を借りてお礼をさせていただきます。皆様どうもありがとうございます。今後ともどうぞよろしく願っています。

（いずみ ひとし・紀伊國屋書店新宿本店）

これまでのじんぶんやリスト

回数	年 月	タイトル	選者
第一回	二〇〇四年九月	いつか子どもに読ませたい本	「本」のメルマガ同人
第二回	二〇〇四年一〇月	希望の到来する器としての身体になる	小島直人(春秋社編集部)
第三回	二〇〇四年十一月	もう一度、詩と出会う。	城戸朱理/小池昌代/小笠原鳥類(詩人)
第四回	二〇〇四年十二月	21世紀の女と男	斎藤美奈子(評論家・著述業)
第五回	二〇〇五年一月	もうひとりの義経	奥富敬之(早稲田大学教授)
第六回	二〇〇五年二月	ぼくたちには植草さんが必要なんだ	晶文社営業部
第七回	二〇〇五年三月	教室の未来	広田照幸(東京大学助教授)
第八回	二〇〇五年四月	春、人文書の森へ分け入る30冊	中山元(思想家・翻訳家)
第九回	二〇〇五年五月	スロー・イズ・ビューティフル―9をまくとということ―	辻 信一(明治学院大学教授)
第一〇回	二〇〇五年六月	自分で考える日中問題―ニュースにはもう踊らない―	毛里和子(早稲田大学教授)
第一一回	二〇〇五年七月	現代思想は死んだのか!? ―空虚な時代を生き抜くために読む本―	谷川 茂(双風舎代表)
第二二回	二〇〇五年八月	戦後60年を問い直す―東アジアの中の戦後日本―	道場親信(大学非常勤講師)
第二三回	二〇〇五年九月	歴史学への誘い	東京大学出版会編集部
第二四回	二〇〇五年一〇月	学校へ行けない 学校へ行かない ―不登校から見えるもの―	芹沢俊介(評論家・著述業)
第二五回	二〇〇五年十一月	ドイツ文学への誘い	池内 紀(著述業・ドイツ文学)
第二六回	二〇〇五年十二月	ゼロ年代の批評の地平―ポストモダンの世界に生きる	東 浩紀(評論家・哲学者)
第二七回	二〇〇六年一月	戦国時代を読む・見る・学ぶ―「功名が辻」時代考証者の選ぶ20点	小和田哲男(静岡大学教授)
第二八回	二〇〇六年二月	海外における日本受容	杉本良夫(ラトロープ大学(豪)教授)
第二九回	二〇〇六年三月	子どもに読んであげたい、読ませたい25冊	小松崎進(この本だいきすきの会代表)

(選者肩書は、フェア開催時のものです)

図書館と電子ブック

「この雑誌、電子ジャーナルは使えませんか？」私が勤務する医学図書館で、利用者からしばしば聞かれる質問である。いまや、とくに理系の研究者にとって、電子ジャーナルは不可欠のものとなった。電子ジャーナルが日本の大学に導入され始めてせいぜい五年、その間に一大学平均の購読タイトル数が五〇倍近くになり、数千タイトルを提供する大学も少なくないというのだから（文科省平成一六年度大学図書館実態調査結果報告）、その普及のスピードはすさまじい。「書架の冊子を繰っていると、思わぬ論文を見ついたりするんだ」と言う先生もいないわけではないが、研究室でお目当ての論文がダウンロードできてしまう便利さには代えがたいらしい。論文という「情報」を得ることが目的ならば、電子ジャーナルは明らかに早く簡便である。また紙の雑誌での思いがけない発見（セレンディピティ）の経験も、電子ジャー

ナルのブラウジングや検索機能に、より強力に存在するだろう。そうすると、これまで「たまたま」紙の冊子という形をとっていた学術雑誌が、電子化・ネットワーク化という時機を得て一気に姿を変えつつあるのは、利用者の志向からしても自然なことといってよい。現在のところ、電子ジャーナルとして存在するのは洋雑誌がほとんどであり、また理系のタイトルの利用が多い。しかし、人文・社会系の研究者も電子ジャーナルを利用し始めており、大学紀要など雑誌の電子化も進みつつある。こと電子ジャーナルに関する限り、かつて図書館の未来像として語られた「電子図書館」は、日常の光景になりつつある。

ところで、近年の電子ジャーナルの急速な普及の背景には、ここ数年の間、日本の大学図書館界が電子ジャーナルの導入を優先課題としてきたことがある。日本の大

赤澤 久弥

学において、通常、本や雑誌の購入決定権は教員にあり、その予算の多くは教員研究費に拠っているため、図書館が裁量できる部分は必ずしも大きくない。しかし、電子ジャーナルは、大手出版社が複数タイトルをパッケージにし、サイトライセンス販売される。その結果、導入パッケージの選択や使用予算の配分を通して、図書館が大学としての購読タイトル構成に一定の関与ができるようになったのである。

さて、電子ジャーナルが一定の普及を見た現在、次は電子ブック（ここでは、ネットワーク上で利用する学術書）の導入を進めようとする動きがある。これは、電子ジャーナルの導入という経験を経た大学図書館による「ネットワーク系コンテンツ」という大学全体に提供可能な資料を導入することにより、大学の学術情報基盤を整備する」というモデルとして考えられる。そして、電子ジャーナルによって研究環境の充実を図った後の方向性として、今後は教育環境の充実が求められるという文脈から、電子ブックには、教育的面からの利用が期待されるだろう。井上さんが指摘するように（人文会ニュース96号）、いまの大学図書館に求められているのは、「研究偏重から教育・学習支援へのシフト」である。もちろん、これは、大学の課題でもある。

しかしここに、電子ブックとして存在するものほとんどは、英語のものであるという問題がある。欧米では万を超えるタイトルがサイトライセンスで提供されており、多くの大学図書館で導入されている。残念ながら英語の資料を読みこなせる学生は多くない以上、電子ブック活用の方向性は、不透明なものにならざるをえない。現在、日本語のオンライン資料として、大学図書館が導入しているのは、辞書・辞典類、新聞全文データベース、経済系や法律系の全文データベースといったものである。ネットワーク上で利用できる学術書は、「東洋文庫」などごく少数であり、そもそも、日本語の学術書の電子ブックは、導入したくても存在しない。そこで今、図書館が、電子資料の充実と教育支援の観点から期待したいのは、日本語による学術書の電子ブックの登場である。さて、ここで、電子ブックの可能性を考えてみたい。

一 電子ブックは使われるのか

雑誌がそうだったように、本もたまたま「紙の冊子」の形をしていたに過ぎないのではないか。今、電子ジャーナルを使いこなしている理系の研究者も、ついこの間までは、ブラウジングやセレンディピティにおける冊子の優位性を語っていたのである。つまり、実際に使える

電子ブックが閾値を超えたとき、普及する可能性は否定できない。それは、電子ジャーナルが、論文数の増加を背景に、論文を複写するという研究者行動の置き換えとして爆発的に普及したのとは違い、ゆつくりとしたものかもしれない。だが、それだけに「本」に象徴される知のあり方に、深い変化をもたらすかもしれない。

二 電子ブックはどのように使われるのか

電子ブックの利用統計によると、アクセスの時間は短かく、利用者は検索機能を活用しているという。つまり、「二冊の本」としてより、細切れの「情報」としての使われ方である。本という入れ物から開放されたコンテンツが、章や節という情報になるのが、電子ブックの特性なのではないか。そこでは、本の情報もネットワーク上に存在するそれ以外の情報も、情報としては等価である。

そうしたさまざまな粒度の情報評価・解釈し、再構成して知識とすることこそ、これから大学が学生に身につけてほしいスキルなのである。

三 電子ブックの発展の可能性は

現在、日本で電子ブックと言うと、電子読書端末のコンテンツとして語られることが多い。しかし、電子ブックの本来の可能性は、ネットワーク上に存在することにあり、電子的に提供されるアイテムがリンクで結びつき、かつ検索可能になったときに、あらたな展開を見せるのではない。電子ブックを読んでいて分からない言葉があつたら、ネットワーク上の辞書で調べる。電子ジャーナルの論文が引用する電子ブックヘジャンプする。検索エンジンの検索結果から求めるコンテンツに辿り着く。そうして知が網の目をなし検索できてこそ、電子化とネ



バルトからとどいた新しいメッセージ

ロラン・バルト講義集成

全3巻

バルト最晩年の、コレージュ・ドゥ・フランスにおける幻の名講義の記録。バルトの思考の現場が初めて明かされる稀有なドキュメント。

●第一回発売中
I いかにしてともに生きるか 野崎 欽訳
コレージュ・ドゥ・フランス講義(979-77) 人間が「ともに生きる」との文学的・思想的意味をスリリングに解明する。A5判・4725円

●続刊(次回・II巻 5月予定)
II <中性>について 塚本昌則訳
コレージュ・ドゥ・フランス講義 1977-78
III 小説の準備 石井洋二郎訳
コレージュ・ドゥ・フランス講義 1978-80

*価格は税込
筑摩書房

サービスセンター 電話048(651)0053
<http://www.chikumashobo.co.jp/>

ットワークの特性が活かされることになるだろう。

四 電子ブックは経営として成り立つのか

電子ブック先進国のアメリカにおいても、現在、電子ブックが収益を生み出すモデルは少ないようである。今後の可能性を探っている段階といっているだろう。立ち上げ時の課題として、電子ブックは、紙の媒体を単純に電子化すればよいものではないため、多くの投資が必要になることがある。そこでアメリカの多くの先行例に見られるのは、立ち上げ時のファンドの存在であるが、これは日本の現状においては難しい。ついで販売時における課題として、電子ブックの個人ユーザ向け販売は難しいと言われている。『Books in the digital age』(Polity Press) また従量制課金は、とくに学生にとって、情報入手の桎梏になりかねないものだから、望ましくない。学生が本を買わないのなら、大学として学習の環境を整える必要がある。そこで研究環境整備として電子ジャーナルを導入したように、教育・学習の環境整備という論理で、図書館が電子ブックをサイトライセンスで導入することが考えられる。ここでは、新刊書が提供されない利用価値は高くない。一方、過去の絶版本が、電子ブックとして使えるならばその知の継承という文化

的意義は小さくないだろう。またサイトライセンスモデルには、スケールメリットの観点からある程度のアイテム数が必要となる。人文会という基盤を活かした、パッケージ構成の可能性は考えられないだろうか。

五 研究室の本と電子ブック

これまでの大学図書館の中で、過去何十年にもわたり言われてきた問題として、研究室に置かれている資料へのアクセスがある。研究者からすれば読みたいときに手元に本があることを望むのはもつともである。しかし、とくに広く資料を渉猟する必要がある学生の「いったいこの本はどこにあるんですか」という声は切実である。ここに、本を広く提供できるようにしたい図書館と手元に本を置いておきたい研究者の相克があった。この問題を電子ブックは解決するかもしれない。紙の本が必要な研究者はそれぞれ購入すればよいのである。研究室に置かれる資料の問題は、おそらくかつての講座制の体質を引きずったものである。電子ブックはそれを「開かれた知」へ転換するきっかけになるかもしれない。

六 大学の教育と電子ブック

日本の大学図書館はこれまで、「教育」に結びついて

くることができなかつた。例えば、講義での必読書を図書館が学生の人数に見合うだけ用意し貸出すという「指定図書 (Reserve book) 制度」が、六〇〜七〇年代に、アメリカの大学図書館をモデルにして実施されたことがある。結局これが根付かなかつたのは、学生が本を読み込み思考する教育スタイルではなく、教科書主義が主流であつた状態にそぐわなかつたからだと言われている。複数人がいつでもアクセスできるという指定図書の趣旨は、電子ブックに適合するものである。そこで電子ブックは、電子指定図書 (e-reserve book) として活用されることが考えられる。教育のあり方と大学図書館の関係を再構築するためのツールとしての可能性が、電子ブックにはある。

前述した井上さんの論でも紹介されていることだが、学生は本を読まない。残念なことにくら上質のコンテンツをもつた本でも、そもそも読まないのである。だが、それで済ましていいはずはない。少なくとも大学が知を生産しそれを継承していく知のシステムと存在しようとするならば、これまで蓄積されてきた知と、それを使いこなす技術を伝えるのが、その存在意義であるはずだからだ。そこで、図書館の役割は、学生を知に導く「仕掛

け」としての環境を作ることである。そして、電子ブックはその「仕掛け」の一つになる可能性がある。菅谷さんが言うように (人文会ニュース94号)、「デジタルであれば紙であれ、文字の情報というのは変わらない」のであり、「文字に書かれた情報をどんなふうに使ひこなしていくのか」が、これからの知識社会に生きる学生に、求められているのである。

もちろん、「本」というものの備える魅力は、これからも失われることはないだろう。しかし、教養として本を読むと言うモデルは、おそらく崩壊した。精緻に編まれた人文書も、いまだきの学生にとつては、インターネットの情報と同列の選択肢となつているのが現実である。しかし、人文書が築いてきたコンテンツの蓄積、「知」というものは、それほど移ろいやすいものではないはずである。今、問題なのは、それをどういう形で提供するかである。これまで本という入れ物に、研究室に、大学 (そして「大学図書館」に) に囲い込まれてきた知を開放し、再構成してあらたな形に再生する可能性を電子ブックは、秘めているかもしれない。その可能性の中で、図書館は、知の継承の一端を担う役割を出版社とともに果たしたいと思う。

(あかざわ ひさや・滋賀医科大学附属図書館)



研修旅行報告

二〇〇五年一〇月三日～一四日、福岡・熊本で人文会研修旅行が行われました。九州地区で研修旅行が行われるのは熊本が九六年以来、福岡が九九年以来となります。毎年六月に行われる地区別に分かれて行うグループ別訪問については福岡地区はここ数年続けています。

今回の主な目的は、新規店では紀伊國屋書店二店舗とフタバ図書一店舗へのご挨拶と状況把握、そして前回の訪問時から激戦が続く福岡地区での研修です。(紙面の都合上、訪問したすべての書店のレポートは出来ませんので、最後に訪問書店一覧をつけさせていただきます。)

第一日目最初の訪問は福岡空港から車で約二〇分、フタバ図書TERA福岡東店です。フタバ図書といえれば広島を本拠にここ数年郊外に大型店を出店し専門書にも大変力を入れていただいている書店です。この店もイオン

を中心とした複合施設に六〇〇坪で二〇〇四年七月にオープンしています。家族づれ中心の土日型、天神からも近く駐車場の利便性もあります。今は入門書中心の売れ行きとのことですが、豊富な品揃えもあり今後専門書の販売動向も注目したいところです。

次は紀伊國屋書店福岡本店と福岡天神店との合同研修会です。昼食をとりながら両店の店長はじめ担当者からの報告があり、福岡本店では現在、哲学・思想の棚の見直しの最中で専門書の販売にはどうしても各ジャンルの知識が必要なため、人材の育成に力を入れていることと、会員社からの情報提供のお願いなど意欲的なご意見をいただきました。続いて会員社からは書店に対する販売活動の具体的な報告がありました。販売実績のデータ(POS)をジャンル別や個別書籍ごとに、他店比較表にして個別書店に対して販売意欲を喚起してもらうもので、

研修の場でも非常に好評で担当者はもとより人文会会員社も参考になりました。

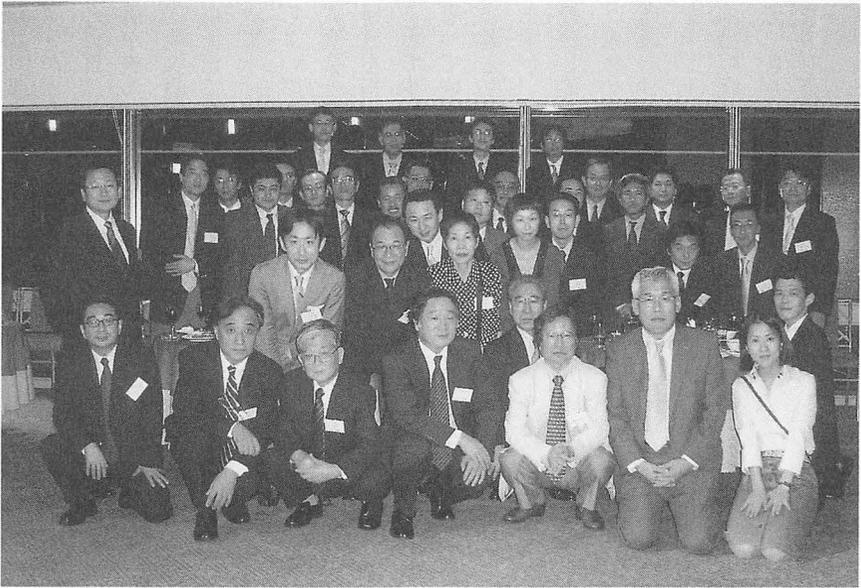
天神に移動してジュンク堂書店福岡店と丸善福岡ビルの合同研修会です。目の前の立地で、羨ぎを削る両店が人文会と合同で研修することは非常にまれなことです。両店からはそれぞれ品揃えや展示方法などの違いや特徴、読者層の分析などの説明をいただき、会員社からは具体的な書籍名をあげて両店の販売実績の分析などの報告がありました。両店店長のご理解がなければなかなかこのような機会を持つことは出来ませんし、会としてもライバル店同士と合同研修の経験を持ったことは、今後の研修方法の参考になりました。

今回は公式には訪問させていただきませんでしたが博多駅前には、あおい書店もヨドバシカメラの三階に昨年の六月にオープンしました。あおい書店もここ数年専門書に力を入れています。とにかくこの福岡地区は激戦がますます加熱しているようです。人文会会員社全体の店頭在庫は確実に増えています。読者にとつては選択肢が増えたわけですが、各店の販売努力がますます問われることとなります。その意味でも各店を客観的にサポートできるような柔軟な態勢の必要性を強く感じました。

二日目は久留米から熊本へ、バスの移動です。紀伊國

屋書店久留米店は二〇〇三年九月オープン。大型ショッピングセンター「ゆめタウン久留米」の二階に出店した、紀伊國屋書店としては先駆的な郊外型です。現在、二年を経過して売り上げは順調に推移しているようです。やはり土日型ですが、最近家族づれにまじり男性客や、ビジネス書・人文書のリピーターも着実に増えていることです。久留米地区ではすでに一番店になっているようですが、課題はいくらでもあるとの前向きな報告に、まだまだ売り上げは伸びるのではないかとという予感と意気込みを感じました。

研修最後の地区は熊本です。ここは福岡地区に続いて新たな激戦地区との感想を持ちました。最初に訪問した紀伊國屋書店熊本店は繁華街下通りで長年一番店として人文会でもお世話になっている店です。この下通りに立て続けに喜久屋書店熊本店と蔦屋書店熊本三年坂店が出店しています。この三店舗は歩いてもすぐの距離です。喜久屋書店も蔦屋書店も人文書には力を入れています。特に蔦屋書店は若者向けの店内レイアウトでありながら高い棚を利用して人文書も在庫量をアピールしています。紀伊國屋書店の店長からは、少なからず影響を受けているが、これまでの知名度を生かし地元に着した販売方法を強化するなどして巻き返しを計っている、との報告



懇親会会場

をいただきました。

熊本では二軒目の出店となる紀伊國屋書店熊本光の森店は、久留米店と同じく郊外の「ゆめタウン」にオープンして一年目の店です。駐車場が二五〇〇台という大型ショッピングセンターでやはり売り上げは好調とのこと。熊本店の売り上げを上回る勢いで、熊本店で注文して光の森店での受け取りを希望するお客も増えているとのこと、両店の連携がうかがえます。人文書の棚は充実とまではいえませんが、やはり期待感はいくらありました。

熊本では他にも蔦屋書店が出店したイオン系のショッピングセンターが我々の訪問一週間前にオープンしたり、秋には九州最大のショッピングセンターの進出が予定されているようで、書店地図はここ数年で激変しています。

今回の福岡・熊本の訪問で感じたことは、両地区とも市街地店と郊外店の競争の激化です。書店の大型化の加速は郊外店に圧倒的に有利です。当然人文書の棚もフルアイテムで展開出来ます。品揃えやメンテナンスさえしっかりしていれば、集客力や車での利便性などを考えると十分市街地店に対抗出来る条件は整っていると思います。紀伊國屋書店が郊外に進出し、いずれも好成績を出している現場を拝見して、人文書といえども今後は販売

環境の変化の動向を見極める必要があるのではないでしようか。なお、紀伊國屋書店は今年九州で大分（四月）と佐賀（秋）にいずれもショッピングセンター内への出店が決まっています。

人文書は棚担当者の力量で売り上げが左右されます。市街地であれ郊外であれ読者は必ず棚をしつかりと見ています。魅力的な棚、活性化する棚にするにはどうしたらよいのか、販売データをどう分析したらよいのかなど、人文会としても会活動の中の研修グループが書店様との研修を担当し、棚担当者の方々とじかに情報交換をすることで少しでも人文書の販売力を付けていただきたいと思っっています。とにかくお互いの顔が見えることを第一に考えています。厳しい販売環境は相変わらず続いています。会として、書店様との研修をますます重要なものとして位置づけて活動していきたいと思っっています。

最後になりましたが、今回訪問させていただいた各書店の店長様、担当者様には貴重なお時間をいただき御礼を申し上げます。また、同行をいただいた販売会社の日本出版販売様・トーハン様・大阪屋様の御三名には大変なご配慮をいただきました。あらためて紙面を借りて御礼申し上げます。

二〇〇五年 人文会研修旅行 訪問書店一覽

（訪問順 敬称略）

*は人文会全体としては初訪問の店

*フタバ図書 T E R A福岡東店

紀伊國屋書店 福岡本店

*あおい書店 博多本店

紀伊國屋書店 福岡天神店

丸善 福岡ビル店

ジュンク堂書店 福岡店

*青山ブックセンター 福岡店

*ブックセンタークエスト 久留米井筒屋店

*紀伊國屋書店 久留米店

紀伊國屋書店 熊本店

*蔦屋書店 熊本三年坂店

*喜久屋書店 熊本店

*紀伊國屋書店 熊本光の森店

人文会会員名簿

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-24 白水社内

2006年4月末現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
慶應義塾大学出版会	小林 文生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁草書房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	持谷 寿夫	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未来社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

(休会：青木書店・晶文社・有斐閣)

代表幹事 佐藤英明
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会 ・企画グループ ◎浴野英生・西谷能英・小林文生・橋元博樹
 ・研修グループ ○段塚省吾・持谷寿夫・華園 斉
 ・図書館グループ ○杉田啓三・藤代俊久・駒谷光彦
 弘報委員会 ・弘報グループ ◎鎌内宣行・成田共助・吉武 創
 ・ホームページグループ ○平川恵一・江波戸茂・馬場正彦

芸術人類学

中沢新一 これまでの仕事の集大成にして、新たな知性の確立を目指した意欲作。芸術と人類学の創造的な融合。 芸文円

アジアを読む

張競 エクソフォニー（母語の外）を生き、それを思索の条件とした比較文学者の8年間80篇におよぶ書評集成。 芸文円

ベートルズとは何だったのか

佐藤良明 音楽が世界を変えていく光景と、時代の変化を生きたリアリティ。歴史の瞬間を再現。『理想の教養』 三交円

バッハ「ゴルトベルク変奏曲」世界・音楽・メディア

小沼純一 歴史の文脈で考え、弾き、聴くことで、「わたしたち」がなぜ好きなのかを徹底分析。『理想の教養』 三交円

みすず書房 (税込)

東京本郷5-32-21 <http://www.msuz.co.jp>

白バラの祈り

ソフィー・ショル、最期の目々

(オリジナル・シナリオ)

ブライナーズドルファー著

瀬川裕司・渡辺徳美訳

2310円

ヒトラー政権に抵抗した学生グループ“白バラ”のソフィー・ショル。世界が涙した映画『白バラの祈り』の完全版シナリオ。

21世紀における芸術の役割

小林康夫編

安藤忠雄、中沢新一、鶴岡真弓、池内了、中村桂子、一柳慧、岡崎乾二郎、川俣正といった各界第一線の識者がこれからの芸術の課題を問う。

2940円

エコノミメーシス

デリダ著／湯浅博雄・小森謙一郎訳

美学の古典、カントの『判断力批判』を鮮やかに読み替える。美の分析論の言説を駆動しているポリティカル・エコノミーとは何か。

1890円

未来社

※表示価格は税込

東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002

tel.03-3814-5521

www.miraisha.co.jp

ミネルヴァ書房

若者が働くとき

「使いつられ」も「燃えつき」もせず

熊沢 誠著 漂流する現代若者労働へ向けた「気づきへの促し」の書。 二二〇〇円

少子高齢化の死角

高橋伸彰著 ● 本当の危機とは何か 朝日新聞ほか書評多数掲載、注目の書。 二六二五円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込み／宅配可

近世藩制 藩校大事典

大石 学編

菊判／二〇五〇〇円

全国約五四〇藩を都道府県別に網羅した詳細・正確な大事典！近世日本を支えた幕藩制と藩校の全貌に迫る。充実した付録と索引付。

精選 日本民俗辞典

菊判 六三〇〇円

福田アジオ・神田より子・新谷尚紀・中込睦子・湯川洋司・渡辺欣雄編
ナマハゲ・見るなの座敷・足入れ婚・オシラサマ・河童・雪隠参り・人身御供・都市伝説…。知っておきたい日本の民俗、七〇〇余を精選！初めて学ぶ人にも最適な辞典。

吉川弘文館

価格税込

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

感染爆発
鳥インフルエンザの脅威

M.デイヴィス／柴田、齊藤 訳 パンデミック前夜。何をなすべきか。ウィルスの狂暴化と種の壁を越えさせる手助けをしたのは、人間だったのだ。 ◆1680円

黄砂 その謎に迫る
岩坂泰信 遠く中国奥地から飛来する黄砂が、地球温暖化を防いでいた？ 雨の種となり、海のプランクトンの餌にも。黄砂の様々な謎を求めて敦煌へ。 ◆1890円

脳のなかの倫理
脳倫理学序説
M.S.ガザニガ／梶山あゆみ 訳 脳のなかの思想・信条が読み取られる？ 脳科学の新時代における倫理・道徳を考える、脳倫理学、遂に日本上陸！ ◆1890円

いわいさんちへようこそ!
岩井俊雄 親子でおもちゃを手作りしオリジナルな遊びを考え出す—そんな暮らしを紹介しフォトエッセイ。◆1575円

紀伊國屋書店
出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918 表示価格は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp>

●スペインの情熱を描く歴史叙述の最高傑作

黄金の川
の興隆

ス페인帝国

ヒュー・トーマス 岡部広治監訳 林 大訳

近世の曙の頃、コロンブスやマゼランなど冒険者たちの人生と、政治や宗教の支配者たちの野望に満ちた人生がみごとに描き出される。今まさに新しい帝国が誕生する姿を雄大に描き出す。A5判2巻セット・美装函入・15750円

大月書店 東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651(代表)
<http://www.otsukishoten.co.jp/> (税込)

慶應義塾大学出版会
(ウェブサイトリニューアル!)
<http://www.keio-up.co.jp>

歴史学と社会理論
ピーター・バーグ著/佐藤公彦訳

歴史研究に活用できる社会学の用語や方法を紹介し、「社会理論は歴史学の役に立つのか」を提示する。 ●6090円

〈妻〉の歴史
マリリン・ヤーロム著/林ゆう子訳

女性にとって、「結婚」は何を意味するのか。「結婚/家族/妻」の概念の変遷を歴史社会学的に分析する。 ●6090円

ピフォアー・セオリー
現代思想の〈争点〉 田辺秋守著

重要な思想家と争点を網羅し、現代思想のあらましがわかる現代思想入門書。 ●2520円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

●The Imaginary Domain: Aesthetics, Parapsychology, & Sexual Transgression
ドナルド・エリクソン著/仲正昌樹監訳 三九〇〇円(税込)

イマジナリーな領域
中絶、ポルノグラフィ、
チェシネルム、セラマイ
ボストモダン系フエニニズム法哲学の旗手コネルが、イマジナリーな領域への権利・保護という視点からポストリベラルな正義論の可能性を模索。コネル哲学理解のための最重要文献。

脱構築と法 適用の彼方へ 仲正昌樹監訳 四八三〇円(税込)

正義の根源 ドルゴチキ、仲正昌樹監訳 三三六〇円(税込)

●ヘゲル左派論叢全四巻、完結
良知方、廣松渉編 A5判四二六頁七九八〇円(税込)

行為の哲学 第一巻
ヘゲル批判の哲学の代表作「チエシニコフ」歴史知序論、ヘゲル人類の歴史、ヨーロッパの三頭制の観照

ヘゲルを裁く最後の審判ラッパ 第四巻 五二五〇円(税込)

御茶の水書房
東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
<http://www.ochanomizushobo.co.jp/>

イラストレート恋愛心理学

出会いから親密な関係へ

齊藤 勇編 現代の若者の恋愛事情にも触れながら、楽しいイラストと興味深いトピックスでわかりやすく解説。 1785円

自傷行為とつらい感情に悩む人のために

ボーダーライン・パーソナリティ障害 (BPD) のためのセルフヘルプ・マニュアル
L.ベル著/井沢功一朗・松岡律訳 心の痛みを和らげる、効果的な援助法を解説。2940円

表現アートセラピー入門

絵画・粘土・音楽・ドラマ・ダンスなどを通して
小野京子著 自分の中の可能性を引き出しほんとうの自分を取り戻すセラピー。 2520円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666 (税込)

浅野智彦 編

検証・若者の変貌

失われた10年の後に 現在の若者叩きは果して妥当なのか。 2520円

小杉礼子・堀有喜衣 編

キャリア教育と就業支援

フリーター・ニート対策の国際比較 若者政策の最新報告。 2415円

M・トマセロ/大塚・中澤 他 訳 心とことばの起源を探る

文化と認知 人間に特有の認知能力とは? 進化の謎に迫る。3570円

勁草書房 http://www.keisoshobo.co.jp

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854

◎全国紙誌で多数紹介、増刷出来! 日本美術の歴史

辻惟雄 A5判/四七二頁/2940円

オールカラー、図版三八〇点

『奇想の系譜』から三五年。縄文からマンガアニメまでを大胆に俯瞰し、その独創的な面白さを伝える。日本美術史研究の第一人者による書下し通史。

装丁・横尾忠則

東京大学出版会

文京区本郷7-3-1東大構内 ☎ 03-3811-8814

ネット社会の未来像

忽ち増刷

宮台真司/神保哲生/東 浩紀
水越 伸/西垣 通/池田信夫
少女殺害と監視社会、ホリエモンとメディアの危機、ウイニー事件の闇。IT日本を徹底分析。1680円

情報学的転回

●西垣 通 IT文明の猪突猛進を我々人間の解放のために「転回」させる思想的試み。1890円

未知なるものへの生成

ベルクソン生命哲学
●守永直幹 来るべき生命論の広大な射程を検証する。3675円

春秋社 http://www.shunjusha.co.jp/
東京都千代田区外神田2-18-6
☎ 03-3255-9611 (価格ほ税込)